

大鹿村中央構造線博物館たより 202号



2026年3月発行

TEL: (0265) 39-2205
staff69@mtl-muse.com

大鹿村の山城① おおしまじょうじょうやま 大島城(城山)



図1 中央構造線地質境界沿いの断層鞍部と断層丘陵(断層分丘陵)
背景は国土地理院陰影起伏図

以前、博物館たより150号(*1)にて、大鹿村の山城の立地と地質の関係についてお伝えしましたが、今月号からは随時、山城を紹介していきます。今回は、大島城です。大島城については、宮坂(2013)(*2)について報告があり、その歴史や城主については不明とのことですが、大河原城の北方防衛のための物見・狼煙台として利用された可能性が指摘されています。

大島城のある丘の形成には、大島城の東側を南北方向に伸びる中央構造線が大きく関わっています。一般に、断層近傍の岩石は、断層運動の繰り返しにより破碎され、侵食されやすくなっているため、断層が尾根を横切るところでは、横から見ると「凹」の字になるような地形ができます。これを断層鞍部(だんそうあんぶ)といいます。そして、断層鞍部を境に分離された斜面下方の山脚部を断層丘陵(近年では断層分離丘とも称される(*3))といいます。大島城は、この断層丘陵地形を天然の要害として利用しており、断層鞍部の部分を空堀として利用しています(写真1)。

大島城の登り口(標高800m)は、国道152号線鹿塩バス停から1kmほどです。登り口付近は、ちょうど中央構造線の断層鞍部にあたります(写真2)。そして、宮坂(2013)(*2)の調査図によると、断層丘陵の頂部(標高約830m)の平地に主郭があるように記されています。図2は、長野県林務部が計測した航空レーザー測量データをもとに傾斜量を算出した図と、宮坂(2013)(*2)にある曲輪(城郭内にある一定区画を分けている区域)の配置を照らし合わせてみたもので、尾根筋に見られる4か所の緩傾斜地が、概ね宮坂(2013)(*2)の4つの曲輪に対応しているらしいことがわかりました。大島城より北では、鹿塩川と中央構造線の距離が短く、断層丘陵地形が発達しないため、大島城は、鹿塩川の谷筋を監視するには絶好の地といえそうです。(宮崎)

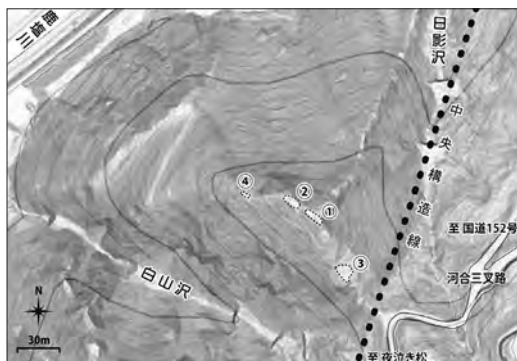


図2 大島城とその周辺の地形と曲輪配置

QGISにて長野県0.5mDEMをもとに傾斜量を算出した図と地理院地図を重ねて表示。色が濃いほど急傾斜で、色が薄いほど緩傾斜を示す。①～④は宮坂(2013)(*2)の曲輪配置に対応させて、緩傾斜の部分を点線で囲んだ。



写真1 市場神社の裏山から見た大島城



写真2 大島城の登り口

◆参考文献

- (*1) 大鹿村中央構造線博物館たより150号(2021)
<https://mtl-muse.com/wp-content/uploads/2021/11/subindex01-04news150.pdf>
- (*2) 宮坂武男(2013)『信濃の山城と館(第6巻)諏訪・下伊那編一縄張図・断面図・鳥瞰図で見る』, 戎光祥出版。
- (*3) 鈴木隆介(2004)建設技術者のための地形図読図入門(第4巻)火山・変動地形と応用読図, 古今書院。